

研究報告

親になった男性の「親性」に関する文献研究

Parenthood of Men, Who Have Become a Parent: A Literature Review

小笠原百恵

関西看護医療大学 看護学部 小児看護学

Momoe Ogasawara

Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Pediatric Nursing

要旨：本研究は、親になった男性の「親性」に関する研究の現状を把握するとともに「親性」を構成する因子やその獲得・発達を促す因子を見出すことを目的とし、1985年1月～2008年12月の日本国内の文献から検索を行った。該当する17件について文献検討を行った結果、男性の「親性」についての研究は社会背景に合わせてなされており、構成因子は、①自己の性質・性格の変化、②我が子への意識・子育てへの意識の変化、③パートナーへの意識・家族への意識の変化、④行動の変化の4因子に、また「親性」の獲得・発達を促す影響因子は、①我が子への関わり、②パートナーとの関係性、③自己の被養育体験、④親になることへの肯定的イメージの4因子に分類された。「行動の変化」に至る動機づけについては明らかにできなかったが、夫婦や親子の関係性をより深めることが男性の「親性」の獲得・発達に重要であることが示された。今後は、様々な個別性に応じた男性の「親性」の獲得や発達を促す援助について明らかになることで、個々の“子育て力”を高めることができると考えられる。

キーワード：親性, 男性, 父親, 子育て

Keywords : parenthood, men, father, child-rearing

I. 緒言

現在、女性の育児を取り巻く環境は社会の変化に伴い、様々な課題が持たれている。従来我が国において男は仕事・女は家庭といった性別役割意識が広く支持され、実施されていた。しかし近年、1980年代と比較して20代後半から30代前半の女性の労働力率が伸び社会進出が進むにつれ、出産後も女性は仕事を続ける方が良いという意識が高まり（内閣府、2007）、家庭生活の上で大切な育児の担い手が母親中心であった状況は変化せざるを得ず、父親の存在が必然的に重要となっている。ベネッセ（2005）の調査で、妻が『今後夫に手伝ってもらいたいこと』の回答で育児が最も多かったことも、家庭における男性の存在の重要性を示す

結果といえる。一方、ベネッセ次世代育成研究所（2007）が行った第1回妊娠出産子育て基本調査によると、父親は『子どものことでどうしてよいかわからない時がある』という不安を28.6%の割合で感じているという結果が示されており、父親が育児を行う上で自信を持って能力を発揮できない現状も明らかになっている。

従来、子どもを育てるために父親や母親として求められる機能や能力は、「父性」・「母性」といった言葉で表現されてきた。日本においては大正時代に資本主義が導入されて以降、女性の身体的特徴と合わせて性別役割分担を進めることが効率的であるとし、母親こそが育児に専念すべきであるという考えから女性特有の特徴と育児への適性と

を直結させて、「母性」という用語が用いられるようになった。一方、1970年代から子どもの非行の増加など社会的不適応が問題視され、家庭内における父親の伝統的な家父長的権限や役割が消失していることが注目され始めた。こういった背景から子育てにおける父親の存在が見直され、「母性」とは対立するものとして男性の子育てにおいて果たす機能や役割を「父性」という用語で表現されるようになった。しかし1980年代の女性の社会進出に伴い、性別役割分担への批判が高まるにつれ、子どもを産み育てる能力は性差に関わらないといった考え方が現れ、新たに「父性」・「母性」に変わるものとしてそれぞれの「親性」といった用語が用いられるようになった（井上ら，2002）。以降「親性」は、男女という性別に関係しない子どもを育てる能力とされ、様々な場面で使用されている。

近年核家族化や少子化が進む中、兄弟姉妹など子どもと接する機会が少なくなり、体験的に子育てを学ぶ機会が減少することで、親が獲得している“子育て力”が低下傾向にあると指摘されている。2003年に制定された次世代育成支援対策推進法の基本的方向の一つに家庭における“子育て力”の向上を挙げていることから、親の“子育て力”を高めることが重要視されていることは明らかである（次世代育成支援システム研究会，2003）。

“子育て力”とは育児を遂行する能力のことを示し、「親性」の概念と照らし合わせると、「親性」こそが“子育て力”の重要な部分を示すものであり、「親性」を高めることは“子育て力”を向上させることにつながると考えられる。

現在、「親性」についての研究は増加し、それらの文献検討もなされている（大橋ら，2009）。しかし母親を研究対象としたものがほとんどで、父親に焦点を当てたものは見当たらなかった。そこで本研究は、特に育児を行う上で重要な役割を担う“親になった”男性の「親性」に関する文献を整理し研究の現状を把握することで、“親になった”男性の「親性」を構成する因子やその獲得・発達を促す因子を見出すことを目的とする。またこれは、男性の“子育て力”を向上させる支援の検討の一助となると考える。

II. 用語の定義

親性：生物学的性差を認めた上で、父親、母親の区別無く、親となることで生じた様々な人格的・社会的行動変化を示し、親であることを自覚し子どもを育むために必要となる能力。但し、親子関係には里親や養子縁組を含まない。

III. 研究方法

1. 文献検索

1985年1月～2008年12月の日本国内の文献を医学中央雑誌Web版、科学技術文献検索システム「J-Dream II」、NII論文情報ナビゲータ「CiNii」より、「親性」「男性」をキーワードに検出し、その中より今回の目的に沿った17件の文献を分析、検討の対象とした。

2. 分析方法

“親になった”男性の「親性」の研究の現状を理解するために文献の動向を把握した。また文献の内容から、男性の「親性」の捉え方や構成因子、「親性」の獲得や発達に影響する因子について抽出し、男性の「親性」の獲得や発達に向けての援助について検討した。

分析の過程においては、文献の内容を様々な因子に分類にする際に、その収集したデータと命名した概念とが一致しているかなど、不十分な理解にならないように小児看護学を専門とする研究者と共に文献を何度も読み返し、その客観性と妥当性を検討した。

IV. 結果

1. 文献の動向

1) 年次推移（図1）

1989年に1件みられた後、1996年までは文献は認められなかった。その後1996年から年に1～2件みられ、2005年においては6件と最も多かった。

2) 研究対象

文献検討の結果、17件の文献が得られた。その文献の内訳は、研究論文が14件、その他が3件であった。研究論文の研究方法は、質問紙調査が11件、半構面面接調査が1件であり、文献検討が2件であった。

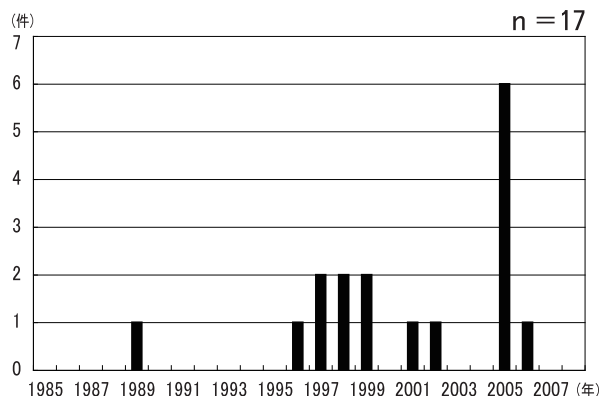


図1 「親性」についての文献の年次推移

2. 「親性」についての視点

文献から「親性」についての捉え方の推移が明らかになった。またその中から「親性」について関連性のある内容を抽出し、構成因子とした。尚、引用した文章は『 』で表し、引用した因子名などは〈 〉、得られたキーワードは“ ”、今回導き出された因子は「 」, 因子の下位項目は《 》で表す。

1) 「親性」の捉え方の推移 (表1)

汐見 (1989) によって「親性」が、『父親も母親も区別無く、親であることとその立場を自覚し、その役割を正しく遂行すること』と提唱されて以来、親になるために必要とされる能力という視点での研究がなされてきた。法月 (1997) は、『親としての仕事や役務、必要な心得を客観的にとらえ、子どもへの関心を持ったうえで、子どもの発達を支援するために状況や子ども自身に応じてそのつど良い対応ができる能力』とし、“子どもへの関心”について言及している。また汐見 (1997) は、『子どもの基本的欲求を上手に満たしてやる愛情、態度、能力が含まれているだけでなく、夫婦でそれをうまく分担する能力』と以前の内容に加え、“夫婦関係”にまでその視点を広げた。その後鮫島 (1998) は、『親性とは、生物的性差を認めた上で、両性ともに親となることにより発達する個人の人格的特性』とし、「親性」とは単に子どもを養護することではなく、子どもを養護することを保障できるような親として自己の“強さ・行動力・安定性”を持つことが重要であると、その内面的な変化についても言及している。

よって「親性」の捉え方の内容から、我が子や

子育てに対する印象や感情などを示す「我が子への意識・子育てへの意識の変化」、パートナーや自分の親といった家族に対して持つ感情や考え方の変化を示す「パートナーへの意識・家族への意識の変化」、親になることで生じた自分の内面的な変化を示す「自己の性質・性格の変化」、我が子を持つことで生じた子どもやパートナーへの行動の変化を示す「行動の変化」の4因子が抽出でき、それらを構成因子と考えた。尚、以下に示す構成因子は文献数の多い順とし、表2に示した。

2) 「親性」の構成因子 (表2)

(1) 自己の性質・性格の変化

池尻ら (1998) は、柏木 (1994) によって得られた“親になる”ことによって発達する因子を基に作成した性質的特性、〈柔軟さ (角がとれて丸くなったなど)〉〈自己抑制 (他人の迷惑にならないように心がけるようになったなど)〉〈視野の広がり (日本や世界の将来について関心が増したなど)〉〈生き甲斐・存在感 (生きている張りが増したなど)〉〈自己の強さ (自分の主義は通すようになったなど)〉についての尺度を使用し、親になることで生じた性質的特性の変化を「親性」の発達の一つとして調査している。鮫島 (1999) は、我が子の誕生に伴い変化する父親と母親の心理的特性を「親性」と概念規定し、山口 (1985) の男性性・女性性の2側面尺度を基に作成した質問項目を使用して、親になった自分自身のイメージを質問し、得られた結果から〈活動・養育因子 (エネルギー、勇敢な、など)〉〈献身・慈しみ因子 (献身的な、従順的な、など)〉〈権威・厳しさ因子 (権威的な、厳しい、など)〉の3因子を「親性」の因子構造として示している。及川 (2005b) は、自身の先行研究 (2005a) で子どもが生まれて自己の中で変化したことを質問し、得られた結果を基に作成した質問紙を用いて調査し、〈次世代因子 (我が子への愛情や親子関係を示す項目)〉〈社会環境因子 (社会とのつながりを示す項目)〉〈生き甲斐因子 (生活への意欲を感じさせる項目)〉〈家族の絆因子 (家族・夫婦関係に関する項目)〉〈世代間因子 (自分の親との関係を示す項目)〉〈抑うつ因子 (抑うつ感情を示す項目)〉を「親性」の因子として導き出した。

表1 文献にみる「親性」の捉え方の推移

題名	年	著者	「親性」の捉え方
父親と育児	1989	汐見稔幸	父親も母親も区別無く、親であることとその立場を自覚し、その役割を正しく遂行すること。
「親性」概念の検討－「母性」概念からの脱皮－	1996	守屋慶子	自己犠牲や受容性、忍従などを特徴とするいわゆる母性とは違うもの。先天的なものではなくその獲得には試行錯誤や学習が必要である。親となる人々の相互関係において創られるもの。
親性の発達にみる「保育参加」の効果－3歳未満児保育を中心に－	1997	法月泉他	親としての仕事や役務、必要な心得を客観的に捉え、子どもへの関心を持った上で、子どもの発達を支援するために状況や子ども自身に応じてそのつど良い対応ができる能力。
母性、父性から親性へ	1997	汐見稔幸	子どもの基本的欲求を上手に満たしてやる愛情、態度、能力が含まれているだけでなく、夫婦でそれをうまく分担する能力。
「母性」「父性」に類似す用語の検討－心理的側面の親研究における概念規定への試み－	1998	鮫島雅子	生物的性差を認めた上で、両性ともに親となることにより発達する個人の人格的特性。親自身に方向性にあるもの。親性には、子どもを慈しみ育む心と技能に加え、それを裏付ける「強さ、行動力、安定性」などの意味も含む。
妻（妊娠期）の働きかけによる夫の親性発達	1998	池尻真紀他	親性の発達とは、①親としての性質の変化、②ポジティブな子どもへの感情・子育てへのポジティブな意識、③夫の行動変化を示す。
父親と母親における子どもの誕生に伴う「親性」の心理的変容（1）－「親性」尺度の作成と因子構造の検討－	1999	鮫島雅子	親となることによって（わが子の誕生によって）変化する父親と母親の心理的特性。性差を越えて両性に望ましいとされている認識が存在し、その方向性は親自身に向いている。親性の因子として①活動的・養育的因子、②献身的・慈しみ因子（母性性・女性性）、③権威・厳しさ因子（父性性・男性性）がある。
妊娠期の妻の働きかけによる夫の親性発達	1999	古田祐子他	親性の発達とは、①親としての性質の変化、②ポジティブな子どもへの感情・子育てへのポジティブな意識、③夫の行動変化を示す。
新生児期の父親の親性発達と言語的働きかけ状況	2001	宗加奈子他	親性とは、①親としての性質の変化、②児への肯定的感情を示す。
妻の妊娠中における夫の親性に関する検討	2005	前田隆子他	両性共に親になることで発達する特性であり、①子どもへの肯定的な感情、②子育てへの関心度、③母性度、④父性度、⑤親の自覚などを含む。
親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討	2005a	及川裕子	“親になること”は、子どもを出産し、養育していく役割を獲得していくことであり、親性は、親となることによって生じる様々な変化を親の発達を示す。①自己の内面的変化、②生活の変化、③役割意識、④パートナーとの関係性、⑤家族のつながり感、⑥他の子への関心、⑦社会についての意識や行動の変化を含む。
親性の発達尺度を試みて	2005b	及川裕子	上記研究を受けて、親性の発達の内容を①次世代因子（子どもへの愛情や親子関係を示すもの）、②社会環境因子（社会とのつながりを示すもの）、③生き甲斐因子（生活への意欲を感じさせる）、④家族の絆因子（家族・夫婦関係に関係するもの）、⑤世代間因子（自分の親との関係性を示すもの）、⑥抑うつ因子（抑うつ感情を示すもの）の6因子とした。

表2 「親性」の構成因子・影響因子

内 容		年 代																
		1985	1986	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	計
構 成 因 子	性 格 の 変 化 ・ 質	性格の変化					2	2		1	1			6				12
		自己抑制・他人への気遣い				1	1		1					5				8
		自分自身の将来・生活についての考え方				1	1		1					5				8
		社会への関心・受け入れ				1	1		1					2				5
	意 識 の 変 化 の 意 識	我が子への肯定的感情				2	1	1						3				7
		子育てに対する責任感												3				3
		家族への意識												4				4
	パ ー ト ナ ー へ の 意 識 の 変 化	パートナーへの肯定的感情												3				3
		パートナーへの行動												1				4
		我が子・育児への関心を示す行動						1	1									2
行 動 の 変 化	両親学級・診察への参加						1	1									2	
	我が子への関わり									1			3				5	
	パートナーとの関係性						1	2					1				4	
影 響 因 子	自己の被養育体験												2				2	
	親になることへの肯定的イメージ												1				1	

(文献の内容から著者が抽出し、分類したため複数記載あり)

このうち、〈社会環境因子〉〈生き甲斐因子〉〈世代間因子〉〈抑うつ因子〉が「自己の性質・性格の変化」を示していると考えられる。

以上からそれぞれの因子や内容について、“親になる”ことで変わったと感じた自分自身の性格を《性格の変化》、忍耐力の高まりや他者への理解の深まりなどを含む自律性の変化を《自己抑制・他人への気遣い》、将来に向けた生活や人生設計への意識の高まりを《自分自身の将来・生活についての考え方》、社会や環境への意識を高めるなどの視野の広がりを《社会への関心・受け入れ》に分類し、その4項目を合わせて「自己の性質・性格の変化」とした。

(2) 我が子への意識・子育てへの意識の変化

汐見(1997)は、「親性」の中には“子どもの基本的欲求を上手に満たしてやる愛情”が含まれるとし、法月(1997)は「親性」は我が子への“関心”を持つことを前提としている。池尻ら(1998)は、『子どもに興味がある』、『子どもを育

てると親も成長する』など我が子や子育てに対する“肯定感情”の発達を「親性」の発達の一つとしている。宗ら(2001)も中西(1989)の親になることの準備性要因を参考に作成した“肯定的育児感情”を「親性」の発達の一つとし、及川(2005b)は『子どもへの愛情が深まった』『親としての責任を感じる』などの我が子への“肯定的感情”や育児に対する“責任感”などの項目を含む〈次世代因子〉を「親性」の因子の一つとしている。よって、我が子や育児への“肯定感情”や“関心”を《我が子への肯定感情》とし、《子育てへの責任感》と合わせて「我が子への意識・子育てへの意識の変化」とした。

(3) パートナーへの意識・家族への意識の変化

及川(2005b)は、『パートナーの成長を感じる』『パートナーへの愛情が高まった』などの項目を含む〈家族の絆〉を「親性」の因子として導き出している。林(2005)は、親になってから生じた考え方やものの見方の変化を質問し、家族へ

の考え方の変化があったという回答が得られたとしている。よって、《パートナーへの肯定感情》と《家族への意識》を合わせて「パートナーへの意識・家族への意識の変化」とした。

(4) 行動の変化

池尻ら(1998)は、『家事をすることが多くなる』という家事の分担、妻への『声かけが増える』・『相談にのるようになる』などの〈パートナーシップへの行動〉の変化や『妊娠中の妻のお腹に触れるようになる』・『育児書に興味を示すようになる』などの〈児への関心を示す行動〉の変化、〈診察・両親学級へ参加するといった行動〉の変化を「親性」の発達の要素としている。よって、《パートナーへの行動》・《我が子・育児への関心を示す行動》・《診察・両親学級への参加》についての変化を「行動の変化」とした。

しかし今回、育児における我が子への直接的な行動の変化を「親性」の因子とした研究はみられなかった。

3 「親性」の獲得・発達を促す影響因子(表2)

文献から男性の「親性」の獲得や発達に影響することが示された内容を抽出し、影響因子とした。影響因子は、直接的に我が子に関わるといった「我が子への関わり」、夫婦関係に対する満足度やコミュニケーション状態を含む「パートナーとの関係性」、自分がどのように育てられたのかという「自己の被養育体験」、「親になることへの肯定的イメージ」の4因子に分類できた。尚、以下に示す影響因子は文献数の多い順とし、表2に示した。

(1) 我が子への関わり

宗ら(2001)は新生児をもつ親を対象に調査し、我が子への言語的関わりを経験がある父親はない父親より親としての性質的特性が発達している傾向を示すとしている。

及川(2005a)は、父親は我が子を『初めて抱いたとき』や『初めてあったとき』に最も親意識を感じるとし、『育児行動による子どもとの相互作用により親意識が高められ、育児関与の度合いがその意識に影響する』としている。浦田ら(2005)は、鮫島(1999)による「親性」尺度を用いて、立会い分娩の有無によって産後1か月の

父親の「親性」に有意差が生じることを示し、立会い分娩を行うことで「親性」獲得が促進されるとしている。よって、我が子への直接的な関わりを「我が子への関わり」とした。

(2) パートナーとの関係性

及川(2005b)はQMI(Quality Marriage Index)尺度を用いて「親性」の因子との関連を調査し、その中の〈次世代因子〉と〈家族の絆〉に相関が高いことから、“夫婦関係の満足度”が「親性」の発達に影響を与えているとしている。池尻ら(1998)は、妻が積極的に働きかけるほど夫の親としての性質的特性が発達するという結果は得られなかったものの、妻が消極的に働きかけた夫と比較して、有意に妊娠中の妻への働きかけや胎児への働きかけなど夫の行動に変化が見られたとしている。よって、夫婦関係に対する満足感や妻からの働きかけなどを「パートナーとの関係性」とした。

(3) 自己の被養育体験

及川(2005c)はPBI(Parental Bonding Instrument)を使用し、「親性」の因子とCare得点、Over-protection得点との関連を調査し、特に「親性」の因子の〈次世代因子〉〈社会環境因子〉〈生き甲斐因子〉〈世代間因子〉〈抑うつ因子〉が自己の母親からの養育体験と有意に関連しており、愛情深く育てられた経験が「親性」の発達を促すとしていることから、「自己の養育体験」を影響因子の一つとした。

(4) 親になることへの肯定的イメージ

及川(2005a)は、“親になることへの意欲”を持つほど親役割をスムーズに獲得でき、親としての発達がより進むとしていることから、「親になることへの肯定的イメージ」を影響因子の一つとした。

V. 考察

1. 年次推移と時代背景について

「親性」が1989年に用いられて以後、1996年までは文献はみられなかったが、その後男性の「親性」についての研究がほぼ毎年なされていることがわかった。これは、エンゼルプラン策定(1994)や男女雇用機会均等法の改正(1997)を受け、女性の仕事と子育ての両立やその支援への意識が高

まったため、男性の育児への参加が重要視されるようになったことによると考えられる。また2005年に文献が6件と急増しているのは、次世代育成支援対策推進法（2003）・少子化社会対策基本法（2003）などの制定により男性の働き方を含めた観点からの支援の見直しに加え、一人ひとりの親の持つ育児を遂行できる能力自体を発達させる必要性が高まることで、その能力に深く影響する「親性」の研究が進められたためと考えられる。この様に時代の流れや社会のニーズに伴い、男性の「親性」についての研究は進められてきた。

一方、1990年頃から児童虐待に関する社会の意識も高まっている（柳澤，1999）。2000年に児童虐待防止法が制定されたにも関わらず、厚生労働省の調査（2009）では児童相談所における児童虐待相談対応件数は急増し続けており、現在も児童虐待の予防に向けた支援が必要とされている。児童虐待は様々な背景が関連することで生じるとされているが、その背景の一つに親の育児知識や育児姿勢に問題があるなどの親の未熟性が含まれていると言われている。子を育てるということは単に育児に必要な授乳やおむつ交換などの手技を取得しているだけでは不十分であり、我が子のありのままを受け入れ、我が子と向き合いながら関わることができるという親自身の精神的な成長が必要であると考えられる。この成長こそが「親性」の発達であると考えられ、個々の中で精神的な成長と手技の習得が合わさって初めて“子育て力”が発揮できるといえるのではないだろうか。現在は様々な状況下における“子育て力”の向上を図ることが求められており、今後も「親性」についての研究が深まることが予想される。

2. 構成因子と影響因子から明らかになった課題

男性の「親性」の捉え方において、親になることで変化する様々な視点について示されていた。「自己の性質・性格の変化」に加え、約半数の研究において「我が子への意識・子育てへの意識の変化」、「パートナーへの意識・家族への意識の変化」を構成因子として挙げていた。つまり我が子への“関心”や“肯定的感情”，“親としての自覚”，“子育てへの意識”，“生活に対する意識”，“パートナーへの意識”などの変化が「親性」と

して示されている。“親になる”ということとは、まずパートナーやパートナーとの関係性が存在し、その後子どもの存在が加わることで成立する過程である。更に家庭背景の変化，社会経験の積み重ねなども加わることで、新たな状況や考え方が生まれ、元々持っていた意識や感情を変えていくのではないのだろうか。「親性」の獲得や発達の影響因子として「パートナーとの関係性」が抽出されたことはこれを示す結果である。また構成因子に「パートナーへの意識」が含まれることは、「親性」の構成因子同士が影響しあう関係にあることも示していると考えられる。柏木ら（1994）も『父親は就業生活によって2も様々な経験をし、人格的に鍛えられ変化する可能性がある』とし、様々な背景によって性質や性格は変化することを示しており、多様な意識や感情が重なり、影響しあい発達させていくことこそが、男性の「親性」を獲得し発達させることであると考えられる。

次に「行動の変化」については、池尻ら（1998）の結果からパートナーとの関係性が良いほど妊娠中の妻への働きかけや胎児への働きかけなど夫の行動変化が期待できるということがわかった。関係性が良い場合は互いに意思疎通を図ることができ、それぞれの役割を調整し、育児に対する不安を抱いても相談しながら互いを補い合えるため、それぞれの親としての機能を充実させるとともに成長しあうことができるからではないかと考える。しかし今回、行動の変化があったという結果は得られたがその結果につながる“きっかけ”については十分に示されていない。行動を起こすにはその理由があり、それがどういった理由かによって行動の内容が異なると考えられる。心理学において“動機づけ”という用語がよく用いられる。

“動機づけ”は、『人が一定の目標に向かって行動を開始し、それを維持する一連の働き』とされ、その中には“内発的動機づけ”と“外発的動機づけ”があるとされている。多くの研究において内発的な要因としての自己決定が自己統制感を高めるとされており、内発的動機づけの方が行動によりよい結果をもたらすと考えられている（無藤ら，2004）。男性の「親性」に当てはめると、妻への関わりなどにおいてその価値や必要性を見出し、自ら決定して行動することで、積極的に、やる気

を持って行うことができるということである。行動する際に頼まれて仕方なく行うのか、自発的に行うようになったかでは行動の継続性や質的な点に違いが生じてくると考えられるが、今回の結果では「行動の変化」にどのような内発的動機づけがあったのかまでは十分に明らかにはならなかった。しかし今回、構成因子の一つに「親になることへの肯定的イメージ」が挙げられた。肯定的イメージは、内発的動機づけの一つとなる可能性があるのではないかと考える。“親になること”は自分の成長につながると思うことで、育児に際して生じる負担も肯定的に受け止め、その困難を乗り越えようと積極性が増し、「行動の変化」が生じやすくなると予測される。よって今後は、より有効な「行動の変化」のためにも、“動機づけ”という視点について明らかにしていく必要があると考える。

その他の影響因子として「我が子への関わり」、
「自己の被養育体験」も抽出できた。花沢（1992）は出産後の母子同室前後の夫の対児感情の比較をし、同室後は児を肯定・受容する方向の感情を示す接近感情が高まるという結果から、母子同室になると父親も我が子との接触経験が増え、我が子を受け入れる感情が発達するとしている。これは我が子へ様々な直接的関わりを持ち、その中で子どもから何らかの反応が返ってくる過程を繰り返すことで自身の関わり方への満足感や充実感が得られ、我が子への愛情が深まるためと考えられる。臼井ら（2001）によっても、我が子と関わるほど「親性」の因子の「自己の性質・性格の変化」に含まれると考えた父性が高まるという結果が示されている。男性は自身で妊娠・出産をする経験を持つことはできないが、我が子と様々な形で関わり、育児に参加していくことで「親性」の中に含まれる親としての自覚や親としてどう役割を果たすべきかという意識を高めていくことができるのではないだろうか。一方、宗ら（2001）は我が子への言語的関わりを経験がある父親は、ない父親より親としての性質的特性が発達し、“肯定感情”も高くなる傾向があるという結果を得たことから、「親性」が発達しているからこそ言語的な関わりを持つことができるとしており、互いが効果的に関係することも示している。つまり、我が

子と関わることで「親性」が高まり、より積極的な関わりへつなげることができるという相乗効果も期待できると考察できる。

「自己の被養育体験」に関しては、及川（2005b）により母親からの被養育体験による影響が示唆されていた。山口（2006）は、『母親は自分がどの様に育てられたかに基づいて、子どもの育て方についての態度が形成され、母親になった時に我が子に対して同じような育て方をする』としているが、このことが男性にも当てはまり、親の養育態度が自分の養育態度に反映されるのではないかと考える。つまり、自分の親を親モデルにすることで育児に対する考え方や臨み方などを体得できるため、自分の親が良い親モデルであると親のイメージを持ちやすく、その役割をスムーズに遂行できるのではないかと考える。そして自身も我が子の良い親モデルになることで、次の世代に伝承され、未来の子育てにつなげていくことも可能となるのではないだろうか。

以上から、男性の「親性」の獲得や発達を促すには我が子と様々な関わりを持つことや、またパートナーとの関係性を親になる前の段階から確立し、妊娠中や我が子の誕生後もその関係性を良好に保つことが重要になることがわかった。そして自身が良い親モデルとなることも次の世代に有効に働くこともわかった。

しかし現在、男性の育児休業についての意識の高まりに対し、その獲得は現実的に十分ではなく、家庭において我が子と共に行動することも少ない現状があるなど、実際の就労形態は育児に対してまだまだ十分とは言えない。男性の「親性」の発達を促すためには、男性が育児をするといった意識の定着や実施できる環境づくりが求められる。また今回被養育体験が影響するという結果が得られたが、1990年代に父親不在が問題視された時代に幼少期や青年期を迎えた世代が、現在“親になる”世代となっている。合わせて、年々離婚率も増加しており母子家庭・父子家庭といった生育歴を持つ場合も増え、親モデルが欠如したまま親になってしまうという可能性も考えられる。このような場合には、佐々木ら（2007）の研究に示される乳幼児とのふれあい育児体験などの青年期の「親性」を発達させる体験を早い段階で持つことが重

要であると言える。また自分一人で子育てをしなければならぬ状況に立たされる可能性もあり、パートナー不在など様々な背景や状況にある男性の「親性」を獲得・発達させることも重要である。よって、まずは今回抽出された因子の視点からその男性の「親性」の獲得・発達状況を知り、不足している部分を補いながら、個々の「親性」の発達を促すことが重要になる。つまり、前述した個々の精神面と手技面のバランスに応じた支援を行うことで、より効果的に男性の“子育て力”を高めることができると考えられる。

VI. 研究の限界と今後の課題

今回の研究は、“親になった”男性の「親性」についての文献検討からその「親性」の構成因子・影響因子を明らかにするものであり、男性の「親性」の獲得・発達には夫婦や親子の関係性をより深めることが重要であると示唆された。しかし近年、“親になる前の”という視点での様々な研究も進められている。その中の一つに、将来親となろうとしている青年期の心理的な親の準備状態を示す「親（性）準備性」といった概念があり、「親性」との関連性が示唆されている。親になる前の心理的な準備状態を高めることは「親性」を高めるために重要であると考えられ、その内容は今後明らかにしていく必要がある。

また今回は「親性」に注目したが、その他「親役割（親役割行動）」や「育児性」、「養護性」、「親意識」などの「親性」に関連すると考えられるキーワードが数多く存在することもわかった。それぞれのキーワードの定義をみると、今回導き出された「親性」の捉え方や構成因子の内容に、部分的もしくは、全てが含まれることが示唆された。例えば「親役割（親役割行動）」は、谷井(1993)により『子どもの人格形成に影響を与える親の子どもに対する行動で、親の子どもに対する態度や認知的側面を含むもの』とされており、血のつながった親子に加え、それ以外の親子関係にある場合にも視点を広げた親の認識や認知面、行動などとしている。つまりこの内容は、「親性」の構成因子の「自己の性質・性格の変化」「我が子への意識・子育てへの意識の変化」「行動の変化」に部分的に含まれるものと考えられる。現在

「親性」についての研究は始められたばかりであり、今後様々な用語と合わせてその概念はより確立していくものと考えられる。

VII. 結論

今回の検討により以下の内容が明らかになった。

1. 男性の「親性」の研究は、社会背景に合わせてなされていた。
2. 男性の「親性」の構成因子は、①自己の性質・性格の変化、②我が子への意識・子育てへの意識の変化、③パートナーへの意識・家族への意識の変化、④行動の変化であった。
3. 男性の「親性」の獲得・発達を促す影響因子は、①我が子への関わり、②パートナーとの関係性、③自己の被養育体験、④親になることへの肯定的イメージであった。
4. 「行動の変化」に至る動機づけについては明らかにできなかったが、夫婦や親子の関係性をより深めることが男性の「親性」の獲得・発達に重要であることが示された。
5. 今後は、様々な個性に応じた男性の「親性」の獲得や発達を促す援助について明らかになることで、個々の“子育て力”を高めることができると考えられる。

謝辞

この研究をまとめるにあたり、ご指導いただきました先生方に深く感謝いたします。

なお本研究は、平成20年度関西看護医療大学研究助成 [承認番号08003] を受けている。

参考文献

- ベネッセ (2005)：今後夫に手伝ってもらいたいこと、夫の家事参加の現状やそれに対する満足度などの調査、http://www.benesse.co.jp/newsrelease/20050406_seikatsu.html (情報取得2009/08/25)
- ベネッセ次世代研究所 (2006)：第1回乳幼児の父親についての調査報告書、研究所報 1巻, pp. 18-21.
- ベネッセ次世代研究所 (2007)：第1回妊娠出産子育て基本調査報告書 妊娠期～2歳の第1子を持つ夫婦を対象に、研究所報 2巻, pp.64-65.

- 深谷昌志 (2008)：育児不安の国際比較，学文社，p.159-199，東京。
- 古田祐子，生塩麻衣，池尻真紀，齋藤陽子，宮野由加利，矢野恵 (1999)：母性衛生，40(4)，pp.482-490。
- 花沢成一 (1992)：母性心理学，医学書院，p.61-91，180-194，東京。
- 林昭志 (2005)：親を生涯発達の観点から捉える心理学的研究の試み，上田女子短期大学紀要，28号，pp.11-18。
- 法月泉，金田利子 (1997)：親性の発達にみる「保育参加」の効果－3歳未満児保育を中心に－，日本保育学会大会研究論文集，50巻，pp.336-337。
- 池尻真紀，生塩麻衣，齋藤陽子，宮野由加利，矢野恵，古田祐子 (1998)：妻（妊娠期）の働きかけによる夫の親性発達，福岡県立看護専門学校看護研究論文集，21巻，pp.171-182。
- 井上輝子，上野千鶴子，江原由美子，大沢真理，加納美紀代 (2002)：岩波 女性学事典，岩波書店，p.55，419，436，東京。
- 井上義朗，深谷和子 (1983)：青年の親準備性をめぐって，周産期医学，13(12)，臨時増刊号，pp.453-456。
- 柏木恵子，若松素子 (1994)：「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み，発達心理学研究，5巻，pp.72-83。
- 厚生労働省 (2009)：児童相談所における児童虐待相談対応件数，児童相談所における児童虐待相談対応件数及び子ども虐待による死亡事例等の検証結果等の第5次報告，<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/07/dl/h0714-1a.pdf> (情報取得2009/08/25)
- 前田隆子，佐々木くみ子，鈴木康江，片山理恵，西村正子 (2005)：妻の妊娠中における夫の親性に関する検討，日本助産学会誌，18(3)，pp.134-135。
- 守屋慶子 (1996)：「親性」概念の検討－「母性」概念からの脱皮－，立命館教育科学研究，8号，pp.189-197。
- 無藤隆，森敏昭，遠藤由美，玉瀬耕治 (2004)：心理学，有斐閣，p.192-211，東京。
- 内閣府 (2007)：女性の社会進出に関する意識について，男女共同参画社会に関する世論調査，<http://www8.cao.go.jp/survey/h19/h19-danryo/index.html> (情報取得2009/08/25)
- 中西雪夫，牧野カツコ (1989)：高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育（第3報）－「準備状態」の構成要素の分析と保育教育への示唆－，日本家庭科教育学会誌，32(2)，pp.61-65。
- 及川裕子 (2005a)：親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討，日本ウーマンズヘルス学会誌，4巻，pp.81-91。
- 及川裕子 (2005b)：親性の発達尺度の作成を試みて，日本ウーマンズヘルス学会誌，4巻，pp.93-102。
- 及川裕子 (2005c)：親性の発達に関する研究－乳幼児の親性の因子構造と背景要因の検討－，埼玉県立大学紀要，7巻，pp.1-7。
- 大橋幸美，浅野みどり (2009)：親性とそれに類似した用語に関する国内文献の検討－親性の概念明確化に向けて－，家族看護学研究，14(3)，pp.57-65。
- 鮫島雅子 (1998)：「母性」「父性」に類似する用語の検討－心理的側面の親研究における概念規定への試み－，鹿児島純心女子大学看護学部紀要，3巻，pp.80-92。
- 鮫島雅子 (1999)：父親と母親における子どもの誕生に伴う「親性」の心理的変容(1)－「親性」尺度の作成と因子構造の検討－，日本看護研究学会誌，22(5)，pp.23-35。
- 鮫島雅子 (2002)：「父親になる」心理的変容に対する「夫立ち会い出産」の効果－「育児性」および「親性」の出産前後の変化－，鹿児島純心女子大学看護学部紀要，6巻，pp.26-36。
- 佐々木綾子，末原紀美代，町浦美智子，中井昭夫，波崎由美子，松木健一，田邊美智子 (2007)：青年期の親性を育てる「乳幼児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究－心理・生理・内分泌学的指標による検討－，福井大学医学部研究雑誌，8(1)，pp.17-29。
- 汐見稔幸 (1989)：父親と育児，母子保健情報，20号，pp.48-50。
- 汐見稔幸 (1997)：母性，父性から親性（おやせい）へ，母子保健情報，36号，pp.10-13。

- 宗加奈子, 伊藤美紀, 花井志野, 原田淳子, 宮下悦子, 古田祐子 (2001): 新生児期の父親の親性発達と言語的働きかけ状況, 福岡県立看護専門学校看護研究論文集, 24巻, pp.177-186.
- 谷井淳一, 上地安昭 (1993): 中・高生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み, カウンセリング研究, 26(2), pp.17-26.
- 浦田知美, 大村五輪美, 山田愛子, 村上紀子 (2005): 出生早期と1ヵ月後における夫の親役割獲得状況と育児参加について, 日本看護学会論文集: 母性看護, 36号, pp.92-94.
- 臼井雅美, 渡部節子 (2001): 父性性に関する研究 - 既婚男性の性役割観の特徴と父性性に影響を及ぼす父子関係との関連について -, 母性衛生, 42(2), pp.360-367.
- 山口素子 (1985): 男性性・女性性の2側面についての検討, 心理学研究, 56(4), pp.215-221.
- 山口淑子 (2006): 母親における養育態度と自身が受けた養育態度との関連について, 龍谷大学大学院文学研究科紀要, 28巻, pp.16-35.
- 柳澤正義 (1999): 改訂 子ども虐待 その発見と初期対応, 母子保健事業団, pp.6-13, 東京.
- 次世代育成支援システム研究会 (2003): 社会連帯による次世代育成支援にむけて - 次世代育成支援施策の在り方に関する研究会報告書 -, ぎょうせい, pp.24-51.

